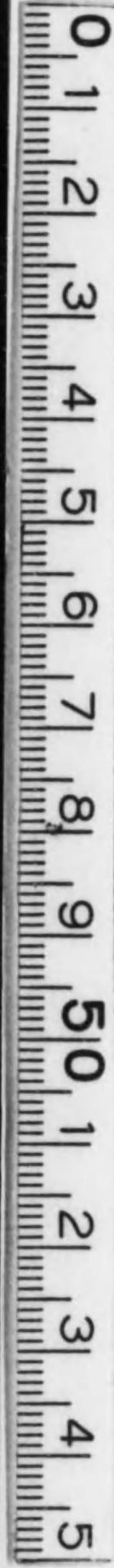


911.168-0422



1200500755711

911.168  
0.422



始





法  
廷  
風  
景

911.168-04227



1200500755111

911.168  
0.422



911.168  
0.422



岡本  
尚一著

法廷風景

八紘發行所刊行





西 910  
號 341

序

今 中 楓 溪

岡本尙一兄の處女歌集の上梓は心からなる歡喜であり、祝着である。更に將來に祈るものが多い。著者は紀南の産んだ熱血多感の士であり、詩情豊かなる存在である。法曹界に於ける兄には定評がある。明晰の頭腦、燃ゆる情熱、鐵の意志、これに加ふるに不斷の努力、斯くて兄は斯界の雄となつた。この人にして歌を愛するはむしろ當然である。士魂と吟魂は一にして二でない。嘗て大審院の大法廷で誘々たる辯論を和歌數首に換へたことは兄の逸話として傳へられてゐる。

兄と私との友情は既に久しきものがある。嘗て或知識人の會合に於て私は二



回和歌について講話をした事があつた。當時聴講の一人としての兄と相知つたのであるが爾後歲月は移つた。昭和八年わが方窓短歌會は誕生し兄の斡旋に依つて私は聘せられて乏しきを指導の任につき遂に今日に到つてゐる。會員諸彦は凡て斯界の錚々たる士であり、且つ作歌熱の旺盛は恐らく天下無比であらう談論風發快絶至極である。而してこの裡兄の舌鋒は特に鋭利、理論整々、小生に肉薄し、特に純情小生の批評加筆に頭を垂る。まさに美しくしき繪卷物の展開である。

この一卷には特異の生命が光つてゐる。歌が力強さを見せてゐる。花の如く石の如く、山の如く海の如きものがある。換言すれば雄渾があり、清純がありまた繊細のよさがある。表現また的確、態度堂々たるものがある。敢て信ずる處あつて天下の法曹と歌壇にすゝむる所以である。

こゑあげてよむべかりけりわが友の心凝りたるこの歌書を

打てば響くうべ高ひびくこれの歌に友ほがひつつありがてぬかも

大審院の大法廷に生命凝り歌ひ上げけむますらをの友は

君にしてかくもよき歌生れけり紀南の風は絶えずかに吹く

やうやくに「法廷風景」をうべなひてうれしげに笑ふ友の他愛なき

日々是好日の古句のよき君に移して歌ぶみをほぐ



## 自序

私は茲に歌集「法廷風景」を世に送る。物資不足の際此出版をするに就いては幾度か反省を試み乍ら、しかも敢て之を爲すに至つたのは、日本短歌の持つ傳統と地位から考へれば紀元二千六百年奉祝歌五首及眞如親王を憶ふ五首のみの爲めにも出版に値するかと私かに念ひ、又詞は拙く調は低くとも私の短歌の大部分は私の長き法曹生活と融合し法曹の感覺を表現してゐる點に於て特殊のものがあるとの信念に動搖を來さなかつた爲めである。

私を斯様に決心せしむるに到つたのは八年間方窓短歌會の指導を賜る今中楓溪先生及共に其會員でもあり且つは「八紘」(舊武都紀)に於ても共に同人たる松本靜史、大住慶三兩兄より熱意ある慇懃と鞭撻を蒙つた爲めでもある。



神代より現代に續く無數の作者群の間に混つて私も二千數百年曾て止まらざる國民的大交響樂の一隅で一つの小さな樂器を奏でてゐるのであらふか。臨戰體制下に於て國家の盛運と共に愈々強く愈々高く奏でらるべきであらふ。

本書收むるところは明治三十九年私の十六歳の時の處女作から昭和十六年八月私の五十一歳に到る三十六年間の作中より四百五十五首を選んだのであるが主としては最近數年間の作であるから收載の順序は逆年別とし各年別中に於ては曆日に従つた、收載歌の選出、書名、印刷、裝幀等に就いては前記三氏と私との合議に依つて之を決定し大住氏は校正の煩勞迄も執られ其の熱誠は或は私自身を超えたであらう。尙楓溪先生よりは序文及序歌を又清瀬先生並に靜史詩宗よりは跋文を頂いて此一巻の光彩とした。

用紙印刷等に關しては増田義雄氏格別の御援助に負ふところが多い、此等の

師友に對して衷心感謝に堪へぬ次第である。

昭和十六年晚秋

岡 本 尙 一

#### 附記

此書の印刷工程も大いに進んだ十二月八日對米英宣戰の大詔を拜し且ハワイの大戦果を聴く。此日私は終日大阪法術と辯護士會館に在り事務所に歸つたのは夜に入つてからであつた。

茲に其日の感激の和歌九首を掲げて記念とする。



感激の終日

岡本尙一

大詔の放送ま近しこの證人訊問しばしを措きて謹み聴かな

宜なひて判事の立てば法廷ゆ流れ出づる人  
らかたみに勢ふ

集ひ寄る辯護士室のラジオ高しハワイの戦  
果は鼓膜をつんざく

萬歳の聲爆發す靜肅にとニュースの次を聴  
き入る同僚等

大詔をろがみさくも戦のやむなきゆゑを畏  
こみ聴くも



暗黒の廊下傳ひにたどり來し院長室は燈か  
げ明るき

戰時司法如何にやあらむ如何あるもわれら  
が同僚に躊躇あらめや

朝にあらず野にはたあらず言あぐる辯護士  
會の協力精神

吐く息も吸ふこの息も天皇の敵と宣らしし  
國を撃つためぞ





（影撮月二年六十和昭）照小者著



歌集 法廷風景

今中楓溪

序 文

岡本尙一

自 序

感激の終日

清瀬一郎

著 者

小照

松本静史

跋 文

跋 文



目次

昭和十六年

元旦の歌(四首)……………五  
 朝刺(二首)……………七  
 堂島川冬景(一首)……………八  
 叔母の葬(三首)……………九  
 事實審理(九首)……………一四  
 辛夷花(一首)……………一八  
 處女入信(四首)……………一九  
 北野天神(三首)……………二二

辯論(三首)……………三  
 母校記念式(二首)……………五  
 道成寺(一首)……………七  
 紀伊湯川温泉(三首)……………六  
 櫻實(三首)……………一〇  
 大阪控訴院(六首)……………三  
 三面子守(三首)……………三  
 花田校長(三首)……………七  
 堅下村(三首)……………九  
 獨ソ開戦(三首)……………四



甲子園ホテル (二首) ..... 四  
 眞如親王を憶ふ (五首) ..... 四  
 決意 (二首) ..... 四

昭和十五年

西成線慘事 (四首) ..... 四  
 電力饑饉 (一首) ..... 五  
 新國劇「大津事件」 (五首) ..... 五  
 知命 (一首) ..... 五  
 八雲舊邸 (四首) ..... 五  
 日御碕 (二首) ..... 五  
 出雲大社 (二首) ..... 五

春日散策 (三首) ..... 五  
 新宮中學校 (九首) ..... 六  
 熊野速玉神社 (六首) ..... 六  
 舊師病臥 (一首) ..... 七  
 熊野展墓 (二首) ..... 七  
 産土 (三首) ..... 七  
 審理不盡 (一首) ..... 七  
 食堂車にて (二首) ..... 七  
 好學 (二首) ..... 七  
 亡友追憶(松本實三君) (五首) ..... 七



瀬戸内海 (三首) .....	八〇
日獨伊同盟 (五首) .....	八三
故郷に來て (十三首) .....	八四
紀元二千六百年奉祝歌 (五首) .....	八九
赤谷山檢證行 (十五首) .....	九三
臨時中央協力會議 (二首) .....	九六
昭和十四年	
急逝(森脇毅君) (四首) .....	一〇一
二月 田 (一首) .....	一〇三
隨 感 (一首) .....	一〇四

兼六公園 (三首) .....	一〇五
温泉知識 (六首) .....	一〇九
挽歌(山根白川君逝く) (六首) .....	一一〇
江戸後樂園 (五首) .....	一一二
慕師の序 (二首) .....	一一五
熱海より芦の湖へ (五首) .....	一二七
先輩追慕(上島益三郎氏) (四首) .....	一二九
阿含經富樓那を看る (四首) .....	一三三
彼 岸 會 (一首) .....	一三三
明治神宮に詣づ (四首) .....	一三四



阪神國道(二首)……………一六  
 一王山十善寺(三首)……………一七  
 改正商法(二首)……………一九

昭和十三年

露の蘆(二首)……………二三  
 春の畦(一首)……………二四  
 高校受験(一首)……………二五  
 讃岐の春(五首)……………二六  
 乳母のたより(三首)……………二八  
 高松大阪間急行船(八首)……………四〇

訴 訟(四首)……………一四  
 ビルの晝燈(一首)……………一五  
 野 良 猫(一首)……………一六  
 丹生上川上中社(一首)……………一七  
 幽 芳 の 菊(四首)……………一八

昭和十二年

楓溪先生の榮譽(二首)……………一五  
 童 心(二首)……………一六  
 大阪驛早春(二首)……………一五  
 麥 の 穂(二首)……………一六



悪瓦斯 (一首) ..... 一七

熔鑛爐立つ (三首) ..... 一八

亡友の遺骨(弔大橋鐵吉君) (四首) ..... 一六〇

家島 (五首) ..... 一六三

金約款訴訟 (七首) ..... 一六五

丹波路 (二首) ..... 一七三

城崎温泉内湯不許の慣行 (五首) ..... 一七四

戦局 (一首) ..... 一七六

支那料理店の主 (三首) ..... 一七七

濱木綿 (六首) ..... 一七九

ラジオ朝のひとつとき (五首) ..... 一八三

時局感詠 (四首) ..... 一八四

看護婦出征 (五首) ..... 一八六

昭和十一年

淀川の冬 (一首) ..... 一九一

悔 (一首) ..... 一九三

獨立 (三首) ..... 一九五

二、二六事件 (四首) ..... 一九七

城崎温泉騒擾 (二首) ..... 一九七

温泉祭 (一首) ..... 一九九



弟の見合 (二首) .....	100
日 蝕 (一首) .....	101
二、二六事件餘聞 (七首) .....	103
上告趣旨補充の和歌 (四首) .....	105
阪神沖大観艦式 (二首) .....	108
歳晚所感 (三首) .....	109

昭和十年

越路の雪 (四首) .....	113
探 梅 (四首) .....	115
弘 川 寺 (二首) .....	117

台湾の地震 (一首) .....	118
阪急前小景 (一首) .....	119
御 衣 香 (一首) .....	120
葛 若 葉 (一首) .....	121
挽歌(高村久之助君逝く) (九首) .....	123
デンドロビウム (三首) .....	126
薔 薇 (一首) .....	128
徹 夜 (一首) .....	129
淀川 鐵 橋 (一首) .....	130
挽歌(遠藤祐太氏逝く) (三首) .....	131



氷 雨 (一首) ..... 三三  
再會の情 (一首) ..... 三四

昭和九年

中耳炎癒ゆ (一首) ..... 三七  
茄子漬 (二首) ..... 三八  
打出濱 (三首) ..... 三九  
月 明 (一首) ..... 四一  
秋 風 (一首) ..... 四三  
關西大風水害 (八首) ..... 四四  
秋 の 野 (四首) ..... 四六

稻 枯 (一首) ..... 四八  
仔犬の死 (三首) ..... 四九

昭和八年

惜人ああ川上博士 (二首) ..... 三五  
激務の春 (三首) ..... 三四  
父の責任 (二首) ..... 三五  
墓 参 (四首) ..... 三六  
小學生兄弟 (二首) ..... 三六  
特許權争訟 (二首) ..... 三六

昭和七年



表	現 (一首) .....	三五
法冠の汗 (一首) .....	三五	
夕ぐれ (二首) .....	三六	
昭和六年		
屠	蘇 (二首) .....	三七
追慕 (日野谷宇市氏) (二首) .....	三七	
汽車の内 (一首) .....	三三	
昭和五年		
長男佛心 (二首) .....	三七	
朝の地震 (一首) .....	三六	

大正十二年	
關東大震災 (二首) .....	三二
海濱所見 (一首) .....	三三
黄昏 (二首) .....	三三
大正八年	
胸病める友に (一首) .....	三七
大正七年	
小閑 (二首) .....	三九
大正五年	
生命 (二首) .....	三五



法  
廷  
風  
景

愁 思 (一首) .....	三六
亡き父母 (一首) .....	三九
大正四年 .....	
椎の實 (一首) .....	三〇
大正元年 .....	
熊野灘の月 (一首) .....	三五
明治卅九年 .....	
白 菊 (一首) .....	三九

總歌數 四五五首



昭和十六年



元旦の歌



大丈夫の爲すべきことをおもほへば年の始も

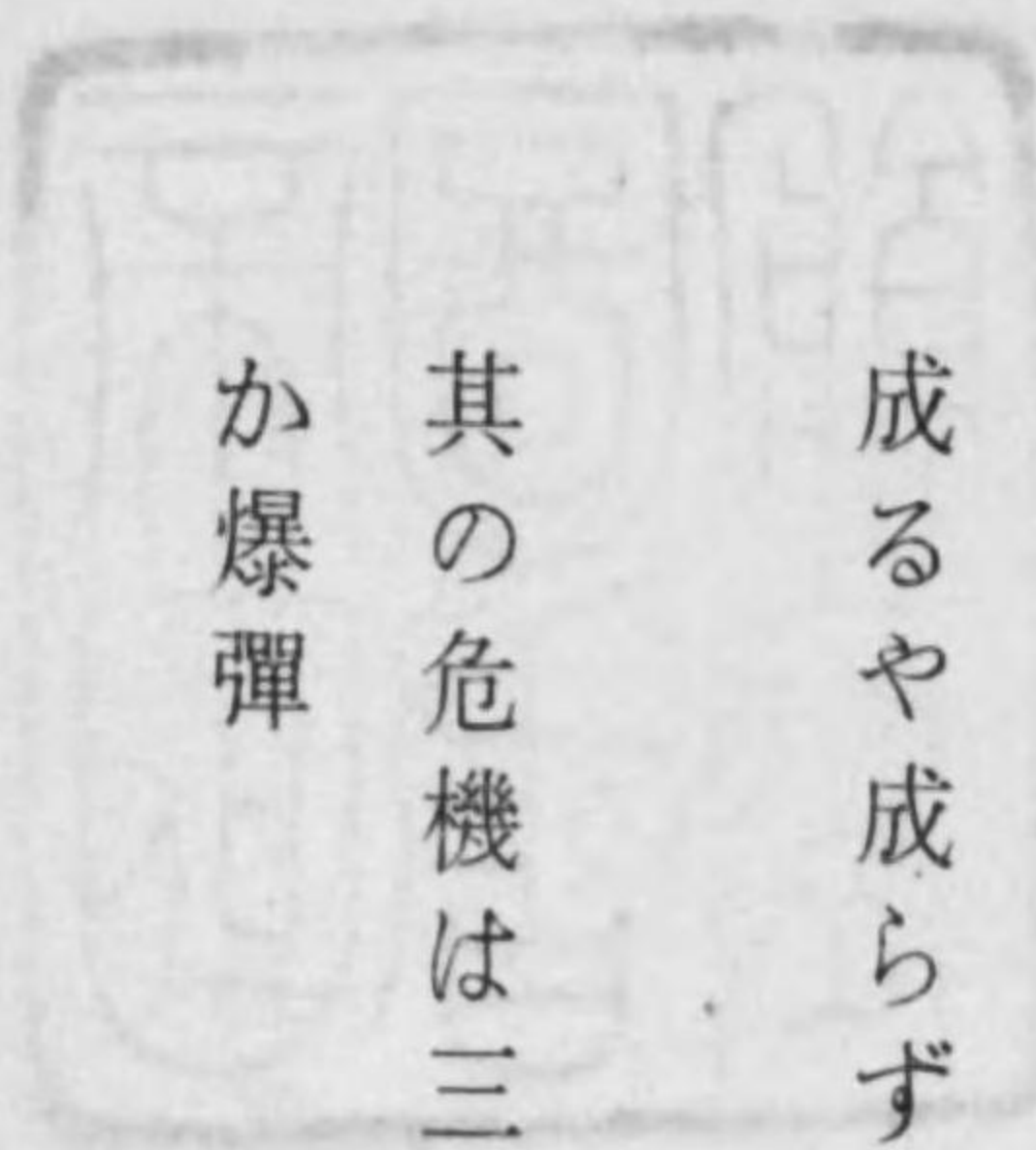
安居しおたさ

けりにはき浮城物語  
ラ顔ほてらして少年われ讀みふ



芳澤がいま現實をまさに見て言ふべきことは  
成るや成らずや

其の危機は三月ならば四月には櫻の花に降る  
か爆弾



朝 剃

朝剃の鏡の向きを變へたれば冬の日射は顔に  
隈どる

口髭を短く切みてかたまりの白毛を切りて我  
ををしみぬ



堂島川冬景

さざなみに足の濡るるや鳩いくつ並みて歩め  
りダム暖き

叔母の葬はふり

昭和十六年二月二十五日叔母阪本たね刀自の葬に列な  
りて亡母を偲び懷舊の情に堪へざるものあり歸途南海  
電車中和歌十餘首成る即ち舊作一首を加へて一聯とす

尋常を卒へつるからは都會地の高等小學に入  
れと父宣らす



みんなみの牟婁の郡ゆおん母に伴なはれ來し  
和歌山の街

たらちねに伴なはれ來し和歌山は城の聳えて  
櫻多かりき

おづおづと進めばすなはち級長となりて驚く  
田舎少年

高塚の祖母もいましぬ馳せ歸るその晝飯時の  
筍の香は

母刀自につづく妹の叔母の君時めく人の妻に  
在しつる

無器用のわれが手つきをあはれみて魚むしり  
て叔母の賜びたり



わが母をまことの母にあらずてふ戯言たはむれごとに泣き  
て怒りし

なれありてわが生はたぬしよき子よと櫻の  
かげに母のたまひき(舊作)

われ十七母みまかりぬ霜生ふるわれ五十ち  
ちふ叔母ゆきましぬ

御命みいのみことの長く在しつる叔母君にくらぶるからに  
母は悲しき

稚子なごの目一人の母を見てしのみ眞まことの母よと今  
も泣かるる



## 事實審理

昭和十六年三月新宮區裁判所に統制違反の公判あり辯

護人として立會ふその被告となりし人五名は皆我と情

誼の繋りあり力を盡して法廷に真相を鮮明にせんと努

む

ふるさとのこの新宮の法廷に今日を初めて我  
は立ちぬる

われが叔父と言はんがほどの老<sup>おきな</sup>見ゆる判事穩  
かに審理を始めむ

目白押しの辯護士席の居心地も落ちつきにつ  
つ審理はかどる

自肅値は如何にし成りし九、一三一四一五の  
經緯の意義はや



九、一八一瀾高し十九日また抑ふとも一瀾高し

自肅値にまた恠こらへつつ待ちて居し協定値成る  
午前一時に

待ち焦れやうやう成りし協定値たちまち賣る  
に躊躇ためらひの無き

軍用材供出の務果すべし認可のことは言擧ことあげを  
せず

述べ終へし被告ひがと人おのおのの苦惱くるしみのかたみに  
通ふ雰圍氣と思へ



辛夷花

枯枝に蝶蝶あまた群ると見む辛夷こふしの花は風に  
ゆれつつ

處女入信

いたつきと戦ひつつも七度の春廻り來て少女  
かぐはし

去年の春蘇芳はさきて居たりけり君病みなが  
ら藤だけてゐぬ



病みて讀む聖書ゆ投ぐる光ありて少女心は信  
に入りにき

大丈夫もいたりがてなる達觀に昨日も今日も  
生きてふ少女は

北野天神

祈らむと北野の宮に參る來ればいまさき揃ふ  
とりどりの梅

神庭の梅の老木おいは片割れの筒かとしなれど花は牙  
えわたる



さき足りて散りも初めず櫻にはまさると見たり  
後苑うしろの一樹

辯論

被告等は親しき友にあればあれわが辯論は情  
に流れじ

夕闇のほのかに迫る法廷にはや二時間を近く  
説き經し



論證の成るてふ思深まりてわが辯論は終りに  
近し

### 母校紀念式

母校新宮中學校四十周年紀念式にて同窓西賴太郎、筋  
師正兩君講演す

晴れがましと筋師が言へば西肯うへなふ母校校長禮みやげ  
の正しき



四十年をことほぐ聲を高あげてわれ晴れがまし  
し發聲するも(祝賀會にて)

道成寺

若葉のうへ薨の見ゆる道成寺ひらけし眼路に  
麥の流るる(紀勢西線車中)



紀伊湯川温泉

湯川は勝浦に近く熊野灘の潮差し入りたるゆかし潟に  
沿ふ

ゆかし潟めぐる小山の若葉かげ高啼き交はす  
いくつ鶯

ゆかし潟舟漕ぎ行けば我を呼ぶ老鶯は數を知  
らなく

大丈夫が櫓をとる腕を染むるまで緑を落す潟  
沿ひ若葉



櫻 實

宮居にはただ一本の山櫻黄の實紅まげの實黒き實  
を着けて

透間より空の青さも通ひ來る櫻の樹かげ實を  
なつかしむ

立ち寄りて木かげを踏みし靴先につぶれしも  
のは櫻の黒實



大阪控訴院

秋されば空の眞青を羽搏<sup>は</sup>きて鷹の來て棲むい  
ただきの塔

蒼錆びし塔のドームを眞中にして赤き煉瓦の  
構造<sup>かまへ</sup>正しき

威あれども慈を包みたるこの建<sup>い</sup>築物<sup>へ</sup>は川を距  
ててつぶさに見給へ

淀川は分れ流れてここに來て停るときし惱み  
を映す

司法官試補たりし日の思出のつながるからに  
われには慕はし



ここにして或は静かに或ははた烈しく言へり  
來る日もしからむ

三面子守

書措きて少女の舞を見むと來ぬ岸博子はや如  
何に踊るらむ

この少女贅肉あらず翻る肢體の線は稻妻に似  
る





おどけたるさまとはいへど清らなる線さまざ  
まに變化す少女

花田校長

短歌研究七月號に花田大人の和歌山高商生遭難を悼め  
る「鬼が城にて」一連二十五首を載す

花田大人鬼が城を歌ふらし電車のうちに楽し  
く讀み始む



何事ぞ朝の心の曇り来て荒ぶる如し悲しみの  
嵐

來む年の年忌供養は校長の和歌をしるして海  
に投ぐべき

堅下村

堅下のなだらの丘は緑濃く白壁の家つらなり  
て見ゆ

見放<sup>さ</sup>くれば山の半は芝生らし葡萄畑と我は知  
れども



山拓き葡萄を植ゑし堅下は富めるがに見ゆ家  
並の高き

獨ソ開戦

スターリン危機を告ぐてふ記事讀めばひたす  
らにして迫るものあり



甲子園ホテル

甲子園ホテルの芝生に轉び居て薄月させる脱  
ぎし靴見る

このあたり螢のあらぬ嘶あり御前會議の噂も  
ありぬ

眞如親王を憶ふ（皇軍海陸南佛印進駐の日）

平城天皇の第三皇子御名は初め高岳親王出家し給ひて  
後眞如親王と申す留唐二十年佛法衰微して觀るべきも  
のなきを慨し唐の咸通七年（皇紀一千五百二十六年）  
御歳八十にして意を決して印度に赴かれんとし羅越國  
に到り虎に遭うて薨ぜらる。羅越國は今の老撾ラオス即ち印  
度支那半島の中央部に於てメーコン河の兩側に在る地  
なりと云ふ、但しシンガポール附近なりとの別説あり



唐國の僧に法問ふ二十年は愚かしごととさと  
り給ひぬ

八十ちてふおん齡もて法の奥處究めむとかし  
こ振ひ立ちます

經採ると天笠さして超えませる山川いづこ現  
今の佛印

寸鐵も帯びいまさねば大虎に御命賜びし眞如  
親王は

つはもの等南佛印の土踏まばかの日の親王を  
まぼろしに仰げ



決意

軍機われいかで知らむや國民の決意のほどは  
家に知る街まちに知る

火は降るも壕には入らじわれ等またそを消す  
べしと女等のいふ

昭和十五年



西成線惨事

ひねもすを仕事に埋れ號外を知らずありしが  
夕刊に見入る

百人のをのこ一瞬に焼き殺すがソリンカーは  
憤ろしも



時ありて御旗の下に死なすべき大丈夫あまた  
死なしめはけり

もつばらにつばらにありてやうやくにことな  
かるべし鐵道びとよ

電力饑饉

日發の責任如何にと我に聽く記者の若さは強  
く匂ひ來



新國劇「大津事件」

北野劇場觀劇會の歌詠まぬわれを珍らとから  
かふ靜史は

溫和しきわが性さがなれば靜史らがつよくも讚む  
るを逆らひがては

かのみかど御心いかに在ましけむおほみことの  
りいやかしこしも

あなかしこおほみことのりを曲げ解きて判事ひんじ  
を強ふかと我は疑ふ

これを見てわが念ふらく此事件劇化すべきに  
あらざりにけり



知命

人を見て佳しと思ひし五十いそちてふ年にはやく  
も我は來にけり

八雲舊邸

きさらぎの朝あしたのひまをくるまして八雲の家に  
來て坐りつる

軒低きこのいぶせやに背高たかからぬヘルンなれ  
ばや住みにけらしも



蓮池の蛙助くと蛇誘ふ牛肉を置きしへルン先  
生

みまかりて賜はりにける従四位をも付けてや  
呼ばむ小泉八雲

日御碕

本州の西のはたての斷崖きりぎしに立てばはてなく浪  
のつづける

猫とまがふ聲鳴き交はす鷗らのい群れて子を  
産む珍ら文島



出雲大社

國拓き國譲りして宮柱太しくつづく出雲大社  
は

國譲る定めのうちには天孫の宮の如くに待つと  
ありけむ

春日散策

若草の堤を下る二筋の小徑に人はあらざりに  
けり

あかしあは櫻と並みて咲き垂るを見るには飽  
かで顔を觸れて見つ



花を見て丘を越え來ぬまた花をくぐれば誰が  
家か門を出でけり

### 新宮中學校

われ熊野の都邑新宮町の中學校を第四回生として卒へ  
しは今を去る三十一年の前なり此の校今年四月二十七  
日第三十九回開校記念日に當り母校出身の坪野校長は  
卒業生を迎へて講演を聴く新しき企てに先づ我を招く

わが卒へし中學校の記念日に講演せむと熊野  
に行くも



友の來てわれに語りぬ人の世の樂しきことぞ  
必ず行けと

串本の磯邊に下りて寄る藻採り鼻にあつれば  
幼くなりぬ

八重櫻すでは老いたる三熊野の玉の浦曲うらまを徒  
歩連絡す

三十みそあまり一ひととせのまへくぐりにし校門に入  
る今朝の思はや

ふるさとの母校の門を入りにつつあやしきま  
では身のひきしまる

仰ぎ見る日の丸の旗するすると登りしたまゆ  
ら君が代きこゆ



わが卒へしこの中學の校庭に君が代きけば涙  
流るる

この机君が居たりきそのうしろわれありにき  
と岡嶋の言ふ

しげみあふ櫻大木はかの頃のその若木ぞと友  
の指さす

われよりは四とせの後に卒業の坪野校長ぞ紹  
介述ぶるは

演壇に立ちてすなはち言こと黙もだすゆゑは知らねど  
涙とどまらず

ありし日の若木櫻のかげにして美少年なるわ  
れぞといはむ



三十とせのむかしのわれを語るときにはかに  
起る若きどよめき

志聖賢に在りと指させば拳をにぎる男の子を  
見たり

語り終へて別れ告ぐれば満堂の生徒とわれと  
に通ふものありぬ

この夜同窓会の歓迎宴ありて盛會を極む

大廣間に満ちてゐる並ぶ同窓を眩しと見つつわ  
れかしてまる

同窓のこの集りの統一體をたくましくしきものと  
しきりに感ず

晝がほどのかの演壇の感激の未だのこりてわ  
れ酔はむとす



熊野速玉神社

翌二十八日朝官幣大社熊野速玉神社に詣づ

杉や樟や樹々の香りをたのしみてゆるやかに  
來し神の御前に

すがすがしと御社に入るをつつましく衣冠し  
て待つつかさありけり

ふるさとのおほみやしろに詣でよと言ひたる  
友はおほまへに待ちぬ

寶物殿拜觀

植野宮司紐解きいだしわれが手に持たしめら  
れぬみたから御劍つるぎ



大越前と唐様に書きし判決の裏の繼判もいか  
めしと見つ

千とせふる女の髪のこの倉に御劍などと在る  
はあやしき

### 舊師病臥

同日對岸三重縣南牟婁郡鵜殿村に老いて久しく病を養  
ひ給ふ中學の舊師大平鬼十郎先生を訪ふ

まかなしくおん唇をうごかして起きむとした  
まふあわてて止めぬ



熊野展墓

三重縣南牟婁郡井田村はわが父母のみまかりませる土地なり

ふるさとの熊野の海を見はるかす御寺の裏の  
おん墓に來つ  
ちちははの御墓の前に立ちつくすわがかたは  
らの友ようからよ

産土

同日午後三時わが誕生の地三重縣南牟婁郡木本町に到り伯父前川佐左衛門邸に入る伯父は東京に在り岡昌義君二十二日大阪に來りて講演の歸途の一泊を誘ひ二十  
六日は串本に二十八日は新宮に出て迎ふ感激深き一夜  
を心盡しの到らぬ隈もなかりき

久ひさに會あはぬうからやからとつぎつぎに禮みやかは  
したのつつ心愉たのしき



うかららとあひてしきりにもとむるは幼なお  
もかけ必ず見せよ

翌朝奥川家、前川家一族の墓に詣つ

生きまして今日をあふべき人あらぬ淋しさあ  
りとこにて言はむ

審理不盡

すめらぎの御名もて爲さむ裁判ども調べ盡し  
て罪すべきかな





食堂車にて

食堂車に朝食あさめしの汁と外米を食うべてあれば青  
田目に泌む

さ青田のさ中に立てる男あり黄の粉を振れば  
風に流るる

好學

辯論のひらかるるまでのいささかを伊語に喰  
ひ入る今井博士は

争點の法理究むと振ひ立ち佛語克服のかの日  
の博士



亡友追憶（松本實三君）

日曜を風邪にこやりてひとり居れば胸痛きま  
で亡友思ひつづく

熊野には早めに散れる梅樹のかげに少年われ  
ら人生を語りし

銀時計の君住友に入りし手紙見てわれはたし  
かに失望したりし

てれくさげわれのまへにて新妻と夕の祈りさ  
さげたりにき

ニューヨークに胸を病みにき歸り来てまた歸  
りにき主のおんもとは



瀬戸内海

汽船の裂く潮の音も浪頭白さも冴ゆる秋の夜  
なれば

渦巻の外をこぎたわむ漁り舟妻の釣るわざや  
瀬戸内海に

島々をつなぐよすがのポツポ船乗せてやあら  
む戀の少女も



日獨伊同盟

御前會議如何にやあらむ想像のいく日の後の  
日獨伊同盟

同盟の既成事實の後にしてヒトラーこそちか  
ぢかしけれ

同盟の後に來らむ日米の危機いまはまた何を  
か言はむ

いままさに世紀の變革すめらぎの御民われら  
は父祖にまさらむか

きびしかる生活に耐へて召しあらば子をもさ  
さげて一步を進まむ



故郷に來て

尾崎榮之助氏等われの爲宴を催さる

檢証に故郷に來ぬ熊の川ゆ獲り來し鮎の老い  
にけらずや

子をもちて姿態ととのへる鮎一尾會席膳に權  
勢振ふ

ふるさとの香り食へよとわが膳の外に置かれ  
ぬ焼鮎三皿

あさもよし紀<sup>き</sup>人<sup>びと</sup>の銳<sup>と</sup>聲<sup>こゑ</sup>室<sup>むろ</sup>内にひびきわたらふ  
酒のすすめば



川務果てて木本町への新線を試む

三熊野の鵜殿の驛を呼ぶ聲に目交まなかひに顯たつ竹原  
翁

今日を在いましここに降りたつ我を迎へ冷酒ひやざけ酌しやくま  
む翁とし思ふ(翁は冷酒を好みき)

一ひと生よただ政治に生きぬ鐵道を熊野を貫ぬきて敷  
かん願ねがひに

この翁を代議士にせんそのためにわれうから  
等と戦たたかひしかな

君立たば翁われ事務長にならむとぞしばしば  
言いひしその翁はや



この年を再び來つる伯父が家の湯殿あたりに  
木犀薰る

井田、阿田和、市木、神志山驛こしの名の一つ一  
つが胸にひびかふ

伯父が家に入りはき伯父は在しはき今日し五  
十ちの我にはあらぬ

### 紀元二千六百年奉祝歌

十一月十一日有恒俱樂部奉祝會にて謹誦す

この佳き日家にこもれどラジオ寄せ大御英姿おほみ  
を仰ぎまつらむ



臣文磨民に代りて壽詞申すと大臣の聲は凜と  
したりき

今はしも大みことのりのらすらし形あらため  
て心にきかむ

われもあぐる萬歳の聲二聲は心に消えて三聲  
は高し

遠つ祖もわがちちははも知らざりし大御榮に  
逢へらく我は



赤谷山檢證行

じやくの尾限りは争無しじやくの尾何處なりやの論なり

山林の境界訴訟にきはむべき山高くして深し  
と聞きつ

トラックの貨物に坐して天の辻馳せて下れば  
野馬に乗るらしき

熊の棲む赤谷山<sup>やま</sup>端<sup>は</sup>百町歩栗山持ちか竹原持ち  
か

黒尾攀ち胸突く坂のうねりくねり<sup>たもと</sup>人ならぬ  
我登り來し



頂線は十津川領と大塔を劃して起伏す赤谷山  
は

高山の頂に来て平あり樹々のすき間の日ざし  
あかるき

山梨てふ珍の圓實拾ひつつ赤實に積まむ雪を  
しぞ思ふ

橡の實の落ちぬがうちに枝折りて樹に貯への  
熊の座やこれは

證言立つる獵夫よ問はむ昇り尾のあなたの尾  
はも名無しの尾かや

黒尾行き高尾昇り尾差し出の尾じやくの尾こ  
そは一山の涯か



起き伏しのじやく野をい行き行き行けばじやく谷さしてじやくの尾くだる

すばやくも判事はよぢぬ梢にてつぶさに見  
らし尾々谷々を

山小屋のほだび楳火は燃えて酒もあり杣人が獲しそ  
の猪煮つつ

石楠花の大群落がありといふ花の無ければ我  
は無しといはむ

黒尾下る川原樋川の向ひ尾の紅葉もみづる樹々を  
賞でつつ下る



臨時中央協力會議

中央協力會議議員日に發表あるに友の名ひ  
ろひつ

古野よし土屋もよろし中央に思ひを叙ぶると  
きいたりにき

昭和十四年



急 逝 (森脇毅君)

そのあした厠より出て脳溢血だと廊下にふせ  
しと妻の君は泣く

そのあした廊下に臥して夕にはそのまま逝け  
る友をいたみぬ



友の葬<sup>はな</sup>り終へたる後にしみじみと友と語らふ  
自<sup>く</sup>動<sup>る</sup>車<sup>ま</sup>のうち

八年あまり共に英書を読みてける高村死にき  
森脇も死にき

二月田

昨日までわが踏み過ぎし二月田に人出で立ち  
て畝をなすみゆ



隨感

利鎌<sup>とがま</sup>もてうばらかつらを刈るごとくよこしま  
ごとは斬りてぞ行かな

兼六公園

彼岸會に入りたる朝越路<sup>あしたこじ</sup>には雪深々と物の動  
かず

清正が高麗ゆ獲してふ燈籠にほどほど積める  
雪のよろしき



春浅み海石塔につむ雪にあしたしづけく酒ふ  
くみ居り

温泉知識

醫學博士藤浪剛一氏新著「温泉知識」を讀むに城崎温泉  
事件に於ける余の所論と全く一致するところあり

うまし國のうまし温泉いんせんをたふとぶと君があら  
はす「温泉知識」



國民のなべて浴るべき温泉は公營主義と君強  
く言ふ

温泉の「公」の性説きに説く此の書見れば心樂  
しも

城崎の内湯は許すべからずと我れも幾年か雄  
たけび來る

おほやけの六つの浴場しつらへて守りてぞ來  
しいく年月を

美濃部博士藤浪博士おのがじし究むるところ  
は我を助くる



挽歌（山根白川君逝く）

驚きはし給ふらむと電話ありて脳溢血に君死  
ぬと聞く

はらかなの陸みに似たる日もありてとほどほ  
しくも思ふ日ありき

よそ人の繪を見よといふ文のありわれは日ね  
もす君の繪を見ぬ

心おほむね山野をめぐる白川に楽しかりけむ  
五十五の生は

必ずや君に随ひ一日を山川ほほけ歩かむと思  
ひし



江戸後樂園

宮本英雄氏に誘はれて

光圀が身をも心も養ひしよき林泉ありと友は  
いざなふ

證人に金貨の字義を問ひつめし心ひるがへし  
後樂園に來ぬ

唐山に象<sup>かたど</sup>る林泉<sup>しんせん</sup>の丘の上に籠<sup>かご</sup>ゆるが如き春の  
逝くかけ

雛<sup>ひな</sup>を率<sup>ひら</sup>てすうい<sup>うい</sup>と行きし鴨<sup>かひ</sup>がなすさざなみあ  
りて花はたゆたふ



梅の實の小さきあたり並みて行くわれ等はけ  
だしいまだ老いずも

### 慕師の序

十餘年前松本丞治博士の著「商法總則」自序に恩師岡  
野敬次郎博士を敬慕し「今ヤ先生高ク台閣ニ班シ公務  
鞅掌眠食且ツ遑アラズ此時ニ當リテ私著ヲ以テ再ビ先  
生ヲ累スガ如キハ衷情眞ニ忍ブ能ハズ」とありしを讀  
みて床しきものと感ぜしが後年松本博士自ら「高ク台  
閣ニ班」せらるゝを見て此感を新にすることありき。  
昭和十四年初夏大阪辯護士會控室に博士とこのことを  
語る



師は今し大臣おとこにませばわが著書ふに煩わづらはさじと  
ことは問はなく

師は大臣おとこものは問はじと嘆かひし博士の君も  
大臣おとことなりぬ

熱海より芦の湖へ

初島をかへり見すれば曲折カクマヅして雲間の富士を  
正面まへに見たり

十國峠脊尾の短きかや花を踏みつつ行けば愁  
あるらしき



天城山名知らぬ山や伊豆の海駿河の海は見る  
にはろけき

箱根路に自動車とどめぬ鶯の夏を啼きかふ高  
音低き音

湖に沿ふ關の跡地はくろーばのいや生ひにつ  
ついや咲きにつつ

先輩追慕（上畠益三郎氏）

歌集ひに孫の歌詠みて孫待つと歸りを急きし  
君なりしかな

虹霧らふ氣を吐けるかな鋭くもよくぞ攻めし  
と我を賞めませる



辯護士の權威のために私は御禮申すと嚴肅な  
御顔

古本を漁りて君に會ひにけり會ひしと思ふ

「カイヨー夫人の獄」

阿含經富樓那を看る

富樓那われや世尊の教蒙りぬ西輸那國に説か  
むぞと思ふ

富樓那なれ行かむ輸那國人荒く罵辱打擲のは  
ては殺さむ



富樓那われ罵辱打擲なにかあらん身の死ぬる  
ときぞまさし解脱げだつは

善し富樓那行けよ汝なれこそ輸那國なに涅槃ねはんの安さ  
説きに説くべし

彼岸會ひがんご

彼岸會のけふを佛にたてまつるマスカットこ  
そみづみづしけれ



明治神宮に詣づ

靖國の社に詣で明治神宮に詣でてのちに爲さ  
むことあり

十一月三日を二日経たれども玉砂利踏みつつ  
涙流るる

そのかみの天長節のおまんぢう頂きしゆゑに  
涙流るるか

純白の鮮衣まとへる同胞はらからのをろがむさまをし  
ばし見まもる



阪神國道

打出より森具もろぐに行くくと國道の銀杏の落葉踏みに踏みつつ

ふりかかる銀杏のうれ葉帽子に受けまた冠りてゆつくりと歩む

一王山十善寺

澁柿のうれたる下の水車工場動力となり居るらしき

灘のかみ一王山の小高きに登りて見れば紀伊ははろけき



水害に肌露あせはなる裏山のかなしきことは鐘に  
告げまし

改正商法

かばかりの改正なればあまたひといく年月を  
消すに足らじな

商法は工兵なりといふを聞く開け歩兵の突撃  
路



昭和十三年



落の臺

十日餘りこやれるひまに垣根にはいそぎて摘  
まな落の臺出ぬ



春の畦

小便の拋物線にもきらめける春の光は畦にい  
つぱい

高校受験

三度目の受験に行かむ挨拶を坐りて言へる切  
實な顔よ



讃岐の春

法然寺池沿ふ苑まも山門も櫻はおよそ散りたる  
らしき

西の海讃岐の國は山鎧ふ佛生山の池も暮れつ  
つ

鐘樓の眞中に在す文珠像春たそがれてうす明  
りせる

獅子二つ踏みませるかな文珠像われいま覺ゆ  
法の尊たうさ

石段をのぼりつくして彌陀と釋迦をろがむと  
きし樂たのきこゆと思ふ



乳母のたより

汝が乳母は老いて貧しくふるさとに暮してゐると伯父ののたまふ

そこばくの金子をとどけし返禮ならむ家につきたるするめ生節

ふるさとの熊野の街に出でたちて乳母は買ひけむするめ生節



高松大阪間急行船

那智丸は高松出でてましぐらに大阪港に行く  
と銅鑼鳴る

舷ほたての右も見飽かず左をも出でて眺めむ瀬戸内  
海は

人住まぬ島の渚の白砂に浪の寄するを飽かず  
眺むる

豊島も小豊島をも後に見て小豆島かげを汽船  
ひたにゆく

小豆島影そふあたり緑丸沈みし海と聞きてた  
たずむ



汽船の浴室を出づればさやかに淡路島裾邊は  
並みて灯のともりたる

人麿の明石の門ぞも岩屋なる燈台の燈の海に  
ながるる

食卓の我に禮する此の汽船の事務長なかなか  
宮人さびす

### 訴訟

この訴訟の初めの頃は君の髪ま黒かりきと相  
手方代理人の笑みたる

一つ訴訟十年つづけて窮まらず上告理由六點  
を書く



日曜の朝の目覺めにも思ふこと訴訟を出でず  
淋しきこの性さが

ひと夏に三日つづけて休みたき希望をもちて  
十年となりぬ

ビルの晝燈

このビルの窓の彼方の白堊ビルに日曜ながら  
晝燈あかるき



野良猫

折々をわれに寄り来る野良猫が身を擦り添ふ  
は魔物めかしき

丹生川上中社

丹生川上中社に詣で来て正午の虹のたちわた  
る見つ



幽芳の菊

いく年を見まく戀ひ經し幽芳の手づくりの菊  
つらつら見たる

この園の菊の精しさわかねども幽芳先生の手  
づくりはよき

明治なかば生れし我になつかしき十一月三日  
の黄菊白菊

支那をうち世界に備ふ今日にして菊見る暇あ  
るわが日の本は



昭和十二年



今中楓溪先生新年歌御會に召さる

住の江の岸によるよる夢路にも通ひて止まじ  
大御歌のこゑ

ひたむきにかへりみもせで行かししに自らな  
る青雲のみち



童 心

枯草の焼け跡見ればそぞろなり心の奥處おくところ童わらべなるらし

大阪驛早春

目白押しに大阪驛に屯せる自動車の屋根早春  
にやはらかき



麥の穂

麥の穂は五寸あまり延びたりつとたちよりて  
小便をしぬ

惡瓦斯

阪神の佃あたりは襲ふ惡瓦斯こそはたくまし  
き奴よ



溶 鑛 爐

我かつて水論に知事と争ひし夢前ゆめさき下流に溶鑛  
爐立つといふ

百町の垂穂の稻田潰しては熔鑛爐六基煙立て  
つべし

湧き出水清ら清らと歌ひてしあたりもけだし  
煤すすやつむらむか



亡友の遺骨 (弔大橋鐵吉君)

鳥取の辯論了へし歸るさをたまたまあへる友  
の遺骨はも

かけ絹の白きがうちの小箱にはつつましきか  
な君の黙もたせる

四十路をば超えつる人ら英書ふを讀むつどひに  
並みし君なりしかな

汽車の窓のんだら畠の菜の花もたそがれど  
きはなにかかなしき